

6. 悪性リンパ腫により腸閉塞を来たした一例

上野涼太、竹山信之、田代裕基、橋本東児、可知真南、加藤和憲、松田光司、山本紗季帆

昭和医科大学藤が丘病院 放射線科

症例は60歳代男性。持続する腹部膨満感、嘔気、頻回の嘔吐を主訴に近医を受診した。腹部単純Xp所見で腸閉塞が疑われ、当院消化器内科を受診した。腹部造影CT所見では小腸の拡張と液貯留を認め、拡張小腸は骨盤内においてcaliber changeを示し、小腸閉塞と考えられた。当初は癒着による単純性小腸閉塞が疑われ、胃管挿入による腸減圧により加療された。しかし、経過で腸閉塞所見の改善に乏しく、CT所見上でtransition zoneに軽度の壁肥厚と造影効果の増強が見られ、所属リンパ節の腫脹も伴っていた。腫瘍性の腸閉塞を疑い、診断と閉塞解除目的に外科的切除が施行された。病理診断の結果、濾胞性リンパ腫の診断となった。一般に悪性リンパ腫の腸管病変はaneurysmal dilatationといった特徴的な画像所見より診断されることが多い。本症例は同所見を呈さず、壁の肥厚により腸閉塞を発症した比較的珍しい症例と考える。画像所見と病理所見の対比や文献的考察を加えて報告する。